

パネルディスカッション

上田周辺の里山と信仰

コーディネーター:

下里 俊行 toshiyuki shimozato
上越教育大学 教授

パネリスト:

宮本 達郎 tatsurou miyamoto
塩田平文化保護協会 会長

内田 一成 issei uchida
作家

コメンテーター:

牛山 佳幸 yoshiyuki ushiyama
上越教育大学 教授

司会: それでは第2部のディスカッション「里山の信仰について」を開催させていただきます。日のご登壇者のご紹介をいたします。こちら側からですが、只今ご講演をいただきました信州大学教育学部教授・牛山佳幸先生です。次に、上田のことをみなさんと共有していきたいと思っておりますので、東信史学会会長をなさっていらっしゃいます宮本達郎先生です。また違った観点から、若い方で、聖地のブームにもなっていますが、レイラインハンターとしてチャレンジ的な研究をしておられます作家の内田一成さんです。そしてコーディネーターとして、ユーラシア史がご専攻で、信州の安曇野の出身でもあられます上越大学教育学部・下里先生に来ていただきました。よろしくお願いいたします。

司会: 本日のご登壇者のご紹介をいたします。こちら側からですが、只今ご講演をいただきました信州大学教育学部教授・牛山佳幸先生です。次に、上田のことをみなさんと共有していきたいと思っておりますので、東信史学会会長をなさっていらっしゃいます宮本達郎先生です。また違った

観点から、若い方で、聖地のブームにもなっていますが、レイラインハンターとしてチャレンジ的な研究をしておられます作家の内田一成さんです。そしてコーディネーターとして、ユーラシア史がご専攻で、信州の安曇野の出身でもあられます上越大学教育学部・下里先生に来ていた

できました。よろしくお願いいたします。

それではこの後はコーディネーターの下里先生にお願いをいたします。

下里: 初めまして、下里と申します。

お隣の新潟県の上越教育大学で世界史を教えております。この3月14日から北陸新幹線で上越と上田も近くなりますので、いろいろとお世話になると思います。専門はユーラシア史ということで、今日のこのテーマに関して全くの素人なのですが、世界史という観点でこれを大きく位置付けるとしますと、世界史の様々な出来事、文化の中でとりわけ隣の大陸・ユーラシア大陸の文化がこの日本列島に流れ込み、蓄積しているように言えると思います。ですから、日本列島の歴史を探るということは、或る意味でユーラシア大陸に生まれた様々な文化を掘り起こすことにも繋がっていくのではないかと考えております。それからもう一つ私は教育大学におりますから、いま教育の課題は非常に重要になっていますが、極めて重要なことは地域に密着した教育ということで、地域に密着した教育ができる教師を作ることがこれからの課題で、強調されてもいます。今日のテーマを若い人たちに繋げていくような努力を是非ともみなさんと一緒にやって

いきたいと思っております。それでは最初に宮本先生からこの地域の歴史ということでお話をいただきたいと思っております。宮本先生宜しく御願いたします。

宮本: みなさんこんにちは。只今から「信濃国分寺と生島足島神社」の歴史についてお話申し上げたいと思います。最初に信濃国分寺ですが、〔スライドを示しながら〕これが僧寺です。こちらが尼寺です。これが18号線、これがしなの鉄道。現在の信濃国分寺資料館はこの辺です。これが信濃国分寺ですが、僧寺の伽藍は、南大門、中門、金堂、講堂からなり、同じく尼寺の方もそのようなになっています。これが昭和40年代発掘当時の見取り図です。信濃国分寺ができたのはいつごろかといえますと、天平13年(741)に詔(みことり)が発せられまして、爾来30年の間にできたであろうと言われております。そうしますと、信濃国分寺ができたのは一番遅くできたとしても宝亀2年(771)年頃かと思われれます。承平8年(938)に平将門が平貞盛を追って信濃の国分寺に来て戦いますが、この時に炎上してしまいました。そのため信濃国分寺の伽藍が建っていたのは、およそ180年の間です。長く建っていたようではありますが、200年足らずで

した。

このお寺は民衆の願いを聞き届けてくれるお寺ではなかったと思います。信濃国の安泰を祈願するお寺で、個人的な願いを聞き届けるお寺ではなかったと思います。庶民の願いを聞き届けるお寺になったのは、どうかといたしますと。ここに見えるのが現在の国分寺の仁王門です。〔スライドを示しながら〕ここに見えるのが本堂です。これはお薬師さまが祀られております薬師堂です。これを八日堂と言っていますので、1月7～8日の縁日を八日堂縁日といっているわけです。この八日堂という名はどこからきたのかといたしますと。この僧寺では金光明最勝王経を読み、尼寺では妙法蓮華経を詠みますが、それを毎月の八日に転読しておりましたので、そこから八日という言葉が出ています。そしてその堂ですから八日堂となったわけです。それが新しい国分寺に八日堂という名が引き継がれ、八日堂ということになりました。この上の段に登った現在の信濃国分寺は、庶民の願いを聞き届けてくれるお薬師様で、特にお薬師様ですので身体の具合が悪い人がここにお詣ると病が治るといことです。信濃国分寺では、1月7～8日に「蘇民将来符（そみんしょうらいふ）」などが頒布され、近くはもとより遠く県外か

らも大勢の方がみえられ、多くの人達に親しまれ信じられているお寺です。信濃国分寺については以上です。

次は生島足島神社です。〔スライドを示しながら〕これは、昔は泥池といったので、私は「泥池、と言いたいのですが、今「上窪池、という名になっています。そこにありますこんもりとした林の中に泥宮が祀られています。これが社殿です。非常に簡素な社殿です。こちらは何を祀っているかといえますと、ここに「泥宮大神、と書かれています。泥を祀っているわけです。泥というのは稲を育てる母ということ。田植えをする時は、代掻きをしてどろどろの状態にしますね。あの泥です。泥には良いイメージは一つもないのです。「泥まみれ、とか「親の顔に泥を塗る、とかと使われ、良いイメージはないのですが、稲を育てる母で非常に大事なものであるのです。それで泥を大事にしなくてはいけないのです。泥から水分を除くと何になるかといえますと、土になります。泥宮というのは、泥を祀っていると言いますが、水分を抜いた土、すなわち大地です。大地を祀っているのです。

これは生島足島神社です。〔スライドを示しながら〕これは生島足島神社の西の門です。この額には東郷平八郎の字が書かれています。これが西側の鳥居です。生島足島神社は

西側が正門なのです。今でも御柱を引いて来る時は、東山から引いて来て南の方をぐるりと回って、この西側から引き込まれるのです。西が正門なのです。この右側に見える赤い橋が御神橋です。普段は、私どもは渡れません。1月1日だけ庶民に開放されます。それで普段は左側のコンクリートの橋を使います。このように橋があるということは、陸続きではなく、ご本殿の祀られているところは島の中ということになります。それで「池心ちしんの宮、とも言われています。この本殿には、生島神、足島神という2柱の神が祀られています。そして向き合うように北側には諏訪様が祀られています。武田信玄には、この生島足島神社という概念はありませんでした。武田信玄は、この生島神・足島神を諏訪神と信じていました。この生島足島神社のご本殿を上社、そして北にある諏訪社を下社と呼んでいました。武田信玄は自筆の願文に「下之郷諏訪法性大明神」と記しています。上杉謙信を破ったらこれこれのものを奉納しますということが自筆の願文の中に書かれています。下之郷というのは、「信濃国」という時に「しなのこく、と書いて、読む時に「信濃の国」というように「の、を入れますね。これと同様に「下郷（しもごう）、ではなく「下之郷（しものごう）、です。

下之郷諏訪法性大明神と神様の名を書いて戦勝祈願をしているわけです。ですから武田信玄の頭の中には、生島足島神社についての意識は全くなく、お諏訪神社様だったのです。それでは、いつ、生島足島神社となったかといえますと、古くは生島足島神社でした。それが中世には諏訪さんとなり、寛政11年（1799）に宗源の宣旨、京都の吉田家からお墨付きをいただきまして、諏訪大明神を正式に生島足島神社と改称したのです。途中、諏訪社になり、寛政11年に生島足島神社になったのです。この生島足島神社のご神体は何かといたしますと、大地なのです。ご本殿の中に、本当の内殿があります。この赤いお宮は上屋で、上に覆いをかぶせてあるのです。その中に白木の内殿があります。その内殿の中は床が張ってありません。ご神体が大地ですので、床が張ってないのです。大地そのものが御神体ということです。先ほどの泥宮も大地、この生島足島神社もご神体が大地ということで、生島足島神社は泥宮から移られたという伝承があります。このことは、レジメに5つの例を挙げて記しておきました。後程、お読みください。これは東の鳥居です。この参道と鳥居は新しくできたものです。それでは誰が造ったかといえますと、享保4年（1719）に松平忠周（まつだいらた

だちか) という殿様が上田城主になった時に生島足島神社の全面的な修造を行いました。その時、東側に参道とこの鳥居を造ったのです。昭和16年(1941)に『上田市史』を書いた藤澤直枝(ふじさわなおえ)先生は、そういう歴史を知る人が少なくなり、困ると言っておられます。この東の参道と鳥居は極めて新しいものであるということです。やはりそういう意味で西の門が正門であるということです。生島足島神社の内殿は泥宮の方を向いているということです。近隣の人とはもとより、遠くの方々まで信じておられ、大変大勢の方が参詣されるということです。私のほうからの信濃国分寺と生島足島神社については以上です。

下里: どうもありがとうございます。引続いて内田先生にレイラインの立場からお話をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

内田: いきなり「レイライン」と言われ、それは何だという方が多いと思えますが…。

私の自己紹介からさせていただきますと、私は内田と申しまして、愛知県鹿島灘という鹿島灘に面した町に生まれ育ちました。が、母方の姓が白田といいます。ですからもともとは佐久の出身なのです。叔父が上田

高校卒業だったりします。私は全然環境が違ふところで生まれ育ったのですが、非常に親しみがあるといえますか、自分のルーツの半分は、上田、佐久というところにあるような気がしております。今日このような機会をいただいたのをすごく楽しみにしてまいりました。

レイラインというのは、よく言われるのですが、幽霊の霊とラインと書いて、霊の通り道だと思われているのですが、これは実は英語でして、`LEY、にラインと書きます。どういう意味かといいますと、イギリスの古い言葉になるのです。LEYという語は、一般的には`草原、という意味ですが、古い言葉としますと光という意味があったり、あるいは禁足地、一般の人が入れない神聖な場所というような意味をもっています。それではレイラインというのは、どういうことかといいますと、日本で言えば、神社、仏閣それに遺跡、そういった聖地と言われるようなところがある特定の日の太陽の光が結ばれる現象を言います。神社仏閣の境内の中の本殿とその他の建物の配置、それらが本殿から見てどのような方向にあるのかを見ていった時に、それぞれが具体的なものを指し示すことになっています。簡単な話、方位を使って聖地の性格を見ていくやりかたです。ただ地図を見る

のではなく、今はGPSや地図のデジタルマップを使います。紙の地図ですと、本来球体であるものを広げていますので、直線上にあるものではないように見えてしまうのです。デジタルマップは緯度経度がはっきりしていますので、それにベッセル関数というものを使って方位を正確に出していくのです。この説明はこのくらいで止めます。

実は2007年の5月にNBS長野放送さんの方で1時間の特別番組を組んでいただきました。[スライドを示しながら] これはその時のクライマックスの光景なのです。これは、先に宮本先生がご紹介くださいました生島足島神社の西の門になります。西の門に向いているものです。こういう光景をご覧になった方はいらっしゃいますか。これは冬至の日です。冬至の日に、西の門のど真ん中に陽が沈んでいきます。これは反対側から見たものです。西の門から本殿を見たものです。これでは、今鳥居の外側に立っているのですが、このように影が本殿に向かって一直線に延びています。鳥居は神様の通り道と言われ、そのため参拝者は中央を外して通るようになると言われていますが、こういう光景を見ますと、実際にまさに神様が通っている光景を見ることができるといふことになります。

[スライドを示しながら] これは

私が写っていますが、胸にぶら下げているのが、GPSというものです。方位を正確に出します。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、普通の磁石を使って方位を見ることもできますが、磁石は真の北は指しません。緯度が高くなっていけばいく程誤差が大きくなっていきます。登山などでは、それを修正して真北を見ますが、GPSの場合はGPS衛星からの信号を使って修正してくれますので、見れば真北が判ります。方位も何分何秒と判るようになっていきます。現場ではこういうものを使っています。今まさに冬至の陽の光が入ってきているところですので、論より証拠ということになります。が、それ以外の場合、参道とかいろいろなものをGPSで記録をしていきます。その場所が、夏至、冬至、春分、秋分の太陽の方向とどのように関わっているのかが解ってくるのです。[スライドを示しながら] これはデジタルマップで方位を見たところです。生島足島神社の参道、ここにラインを引いて見ますと、参道の向きだけではなく、他の神社仏閣とネットワークができていくことが見えてきます。生島足島神社から見た時、信濃国分寺の方向は夏至の太陽が昇って来る方向です。背後は冬至の太陽が沈んで行く方向です。信濃国分寺、生島足島神社、泥宮それから女神岳、

別所温泉の裏にある山ですね、これらが寸分違わず一直線なのです。これは夏至の太陽が昇る方向と冬至の太陽が沈む方向をびたっと指しています。

いくつか傾向があります。冬至や夏至というキーワードで、その方向に向いているものは、たぶん太古の太陽信仰のなごりを留めているのだと思います。宮本先生からもありましたが、生島足島神社と泥宮は大地を祀っている。その土地自体が御神体であるという考え方は、まさに縄文時代の考え方と一緒です。もしかしたらですが、縄文時代には泥宮辺りにはストーンサークルがあったのかもしれない。このように冬至・夏至を意識した方位に向いている場所を発掘してみますと、その下から縄文遺跡が出てくるケースが非常に多くあります。同じラインが下にありますね。ちょっと短いですが、これは塩田平の別所からのラインで、これはまったく同じラインを描きます。こういうことに関して、冬至を意識してこういう配置をしましたと書いてある文献的なもの、資料は無いのです。これは何かの秘術なのかもしれません。それでわざと表さないのかもしれない。ここに見られる様な形にできているということは、塩田平全体の構造が夏至と冬至を意識しているのではないかと思うので

す。夏至の太陽が塩田平に向かって入ってきて、最終的に別所温泉で集約されるというような形になっているのです。別所温泉の背後は山がぐるりと囲んでいます。これは、風水で言いますと、立地としては力が漲る場所ということになる典型的な形をしているのです。そこへ、夏至の太陽、夏至は一年で一番太陽の力が強くなるわけですから、その力を呼び込んで行く。ですから、みなさんは大地の力がすごく強いところに住んでおられるのです。

〔スライドを示しながら〕これは生島足島神社の正殿が向いている方向をラインで延ばしたものです。普通、神社というものは、本殿はどちらを向いているかお解りですか。普通は南を向いています。それがノーマルです。まれに東を向きます。これはけっこうな数があります。それから、先ほどから見てきましたように、夏至・冬至を意識して夏至冬至の日の出の方向に向いているものもあります。それ以外のものがあります。それ以外のものは太陽信仰というものから外れます。生島足島神社は奇妙な方向を向いているのです。北向きなのですが、北よりも若干西に傾いているのです。それを直線で表していきますとどうなるのか、これは意外や意外ですね、背後に富士山を背負っています。富士山から甲

斐善光寺、武田神社、甲府のど真ん中を通して、生島足島神社に来ています。北向観音も入っていますが…。その先は何か。川中島です。武田信玄が生島足島神社に拘った。どうして甲斐の武田氏が言うなればちょっと辺鄙な場所、神社に注目したかというあたりを方位でみますと、富士山が発する力、自分たちの本拠地である武田の力のようなものを導いていく方向を指して願掛けをしたのではないか、そんなふうにも見えないかということ。これはちょっと問題提起なのですが、方位を見ていくと意外なものが見えてきますという例なのです。

今はGPSをわざわざ使わなくても、スマートフォンに電子コンパスというものが入っています。それは正確に北を指してくれます。神社やお寺に行ったら、その向きを測ってみると面白いものが見えてきます。これは先ほどと同じ線です。この曲線になっているのが上田電鉄です。これを見ますと、上田電鉄もこういったラインを意識しているのかなと見えてくる。これはイメージですが、夏至の太陽の光がこのように導かれて来るということをビジュアルにしてみましたということです。文献資料はもちろんとでも大事です。文献資料から入らなくても、このように方位ということから入っていくと、これは何

だろうという事が出てきます。そこから文献資料に入っていくというアプローチの仕方もあるのです。私はどちらかという実地から入り、なんだろうというから、そこから図書館に通い始めるというようなことをしています。一つのツールとして、方位から歴史に入っていくことをみなさまがお試しになったら面白いだろうと思ひまして、ここで話をさせていただきました。ありがとうございました。

下里：私は専門が歴史学ですが、最近歴史学で強調されていることは、歴史は時間を軸に見ることを重視してきたのですが、地理的空間的な要素については今迄軽視してきたのではないかという、そういう反省があります。地理的な見地からの方法を歴史学に取り入れることが大きな課題ではないか、歴史地理学の分野でもそう言いますが。そんなことを感じました。それでは引き続き、宮本先生に次のテーマについてお話を聞きたいと思ひます。

宮本：それでは「東山古墳支群について」ということです。東山古墳支群というのは、下之郷古墳群の中の一つです。下之郷古墳群は数が一定していなく、困っていました。20数基から50数基、あるいは人によって

は80数基あると言われていて決定していなかったのですが、昭和61年に上田市教育委員会で調査をした結果、数が明らかになりました。墳丘石室、石室が確認されたものが17基、石室の存在は不明だが土盛りや墳丘と確認できるもの、封土の土盛りが崩落して現在は見るができないが古墳であると認められる石積のあるものが21基、それから集石があり古墳の石材と推定され古墳があったと認められるものが6基、合わせて44基が確認されています。ところが、以前に報告されているものももっとありますので、今後も発見される可能性があります。この古墳支群は1ヶ所に集中しているわけではなく、ばらばらになっていますが、一番離れているものは2.3kmくらい離れています。尾根筋その他地形の条件によって紅平古墳支群、東山古墳支群、塚原古墳支群というように、下之郷古墳群は9支群に分かれています。このうち生島足島神社の奥社があるところにあるのは東山古墳支群、これは『小県郡史』によりますと、40数基の塚があったとなっています。麓に展開する塚原古墳支群と共に本古墳群の中心で、これが東信地方最大の古墳群であると言われています。

〔スライドを示しながら〕こちらが他田塚（おさだづか）古墳です。これが塚穴原1号古墳、この二つが

いい例ですが、このような古墳があるこの辺一帯を「古（いにしえ）の公園」としてみなさんに親しんでいただいています。今、「他田塚古墳」というのが出てきました。これは「おさだづか」と読みます。ですが普通はこのようには読みません。これはどうしてこうなっているかと言いますと、多氏（おおし）の系統が科野国造（しなののくにのみやつこ）になったということが言われていますが、熊本県の阿蘇を拠点とした多氏、その神八井耳命（かむやいみのみこと）これは神武天皇の第2皇子になりますが、この系統が信濃へ入って国造になったということです。国造は、長野県の中では小県郡にあったという説が有力です。多氏が科野国造となったというその根拠の一つは、塩田平に阿蘇という地名があることです。今も阿蘇岡、阿蘇岡山、阿蘇神社などがあります。しかもその地名の残る一帯が、古来から「阿蘇の郷」と称えられていたということが『和名抄』という書物に載っております。本郷は阿蘇の郷の中心地であったと言われていました。塩田に阿蘇の多氏が入ったという動かない根拠の二つ目は、式内大社・生島足島神社が鎮座していることが証拠として考えられているのです。

〔レジメを示しながら〕そこに系図を載せておきましたが、「神八井

耳命（かむやいみのみこと）、その息子が目古君（めこのきみ）、麻背君（ませのきみ）とこのように続いています。その中で注意していただきたいのは、目古君（めこのきみ）です。これが訳語田幸玉大宮朝舎人供奉（おさださきたまおおみやあさとねりぐぶ）となっております。この訳語田（おさだ）が、他田塚になったのであろうと考えられるわけです。下にもう一つ麻背君（ませのきみ）ここに「磯城島金刺宮大宮朝復科濃国造（いそきしまかなさしのみやおみやあさふくしなのくにのみやつこ）」となっています。この金刺というのはどこに残っているのかと言いますと、実は手塚に「手塚太郎金刺光盛」という名として残っています。ですから多氏の系統が、一つは東山古墳群の他田塚に残っていますし、金刺の方は「手塚太郎金刺光盛、すなわち木曾義仲の重臣ですが、金刺光盛として残っているということです。これらのことから、多氏の系統が信濃国造として入ってきたのではないかということが考えられるわけです。以上でございます。

下里：ありがとうございます。それではここで会場からご意見あるいは質問などいただきたいと思います。本日は、東山在住の方で、村山隆さ

んがいらっしゃっていますので、お話をいただけないでしょうか。

村山：急に振られて何を言ったらいいのか分からないのですが、私は質問があります。内田先生のレイラインのことですが、私は以前から聞いておりました。それで調べてもいました。ところが、そういうことは学会などでは表に出てきませんね。それは歴史学の中に壁があるのではないかと思うのです。でも、実はレイラインのようなことは、本当は現実にあって、今日、内田先生がこの長野大学という場で公に話されたということなのだと思うのです。今までは、宮本先生以外の歴史学の先生がたにはなかなか理解されることはなかったように思うのです。それは何故なのか。その問題が私の胸の中につかえていたのです。もう一つは、レイラインの生島足島神社から信濃国分寺のラインのその下がまさに東山なのです。そのラインの下に、まだ埋もれている先ほど宮本さんが指摘したような古墳群があるのではないか、あるいは民衆が大事にしていた大きな岩、あるいは修験者の跡、そういったものがたくさんあるのです。私が思うには、かつての人々はそういったものと密接な係わりをもっていた。また民衆と結びつけた修験者がいましたが、明治の神社統

制の中で、そういったものから分離され、またそのようなものの意義を否定されてしまった。その結果民衆から離れ、埋もれてしまっています。問題は、その史実を我々は聞かないと知らない、分からない。でも聞かなければいけない多くのお年寄り達はどんどん亡くなっていくのです。例えば、御堂寺原（みどうじはら）という地名がありました。でも今は埋もれてしまっている。何をいいたいかと言うと、かつてあった事が我々には伝わっていない。すなわちまったく空白の時代になってしまっている。それを紐解くことが、今日のテーマなのですね。まだこれからののかなとは思いますが。でもひょっとすると永久に忘れられてしまうのではないか。それを紐解いて表に出すことがかなり大事なことであり、そう思うと思っています。そういうことを考えるきっかけになりました。以上です。

下里：二つ論点があると思うのですが、一つはレイラインというのを学問的にどう位置づけるのか。日本史の牛山先生には後程コメントをいただきますが、世界史の分野だと考えなければならぬ要素になっています。と言うのは、事物を配置する時にはそれを設計する思想が根本にあるわけですから。適当に配置するわけで

はないのです。そのことは古来からのユーラシア大陸の遺跡に関しては指摘されている。有名なのが中国の風水です。それ以外にも、先ほどの冬至・夏至のことですね。冬至・夏至も、地軸が長い歴史の中で変わってきましたから、現代の冬至・夏至は修正して考えなければならないのです。もう一つは、夜の星に基づいた設計思想、大きなものがシリウスです。先ほども言いましたが、歴史の中で空間の要素、地理的な要素、その設計思想は世界史の方では、今後の大きな課題として位置づけられているのです。地域の問題も同じ視点で考えなければならぬと思います。もう一つは、みなさんの中に残っている、また伝えられている、伝承の要素、これはこれからどんどん失われていきますから、是非とも記録に残し研究者に提供していただきたいということです。それに関連した大きなことが、神社の合祀、もう一つは廃仏毀釈ですね。明治政府がいかに地域の歴史遺産を破壊してきたかということにも理解を深めていく、その上でまだ間に合いますから記録していく、地域の歴史をみなさんが記録し残していくことが大きな課題、その時空間的な要素に注意を払う、地名にも注意を払う、伝承にも注意を払う。そういうことだと思います。他にご意見がありましたら、どうぞ。

宮澤：宮澤と申します。信濃の国は元「科野」と書きますね。縄文時代と大和民族の境が上田だったと聞いたことがあります。そこへ奈良朝廷が国分寺を建てたと聞いたことがあります。宮本先生はそこはどこのように思われますか。科野神社がありますよね。あの神社もけっこう古いようにも思うのです。

宮本：国分寺が建立されたのには国府との関係があるかと思うのです。生島足島神社も国府の候補地の一つとして挙がっていますね。神科、信大の繊維学部と国分寺の北側の4ヶ所が、国府のあったところと推定されています。が、現在もう一つ国府はあったのではないかと〔東信史学会の〕『千曲』の中で発表されています。国府が置かれたことを宮澤さんはおっしゃっているのでしょうか？国府が中心だと？生島足島神社は日本の中心だと言っていますね。どなたがそういうこと言ったのか、でもこの辺はそういう要素があったのではないかなと思います。私にはこれ以上のことは申し上げられません。申し訳ありません。

下里：宮本先生、それでは最後のテーマについてお願いいたします。

宮本：それでは初めに「別所」から

申し上げたいと思います。別所については、『国史大辞典』（吉川弘文館）から調べたことをそこ〔レジメ〕に記述しておきました。未開発の土地のところに造成された一大宗教施設というようにそこに記述されています。比叡山・延暦寺の黒谷別所とか高野山・金剛峰寺の東別所、これらは非常に大きな「別所」ですが、各地方にも「別所」がありました。この別所の性格は、特定の寺院を離れた僧侶、例えば国分寺のような公のお寺で定年退職をしたような僧侶、それから一つのお寺で次の人に住職を譲って自分はそのお寺の中心的なことから離れた僧侶、そのような円熟した僧侶が寺を離れ別の地に、すなわち別所の地に集まって来たということです。そこにまた聖（ひじり）といった僧侶も来て、自分で修行もし、化（け）他（た）と言って他人を教化する、そういった生活をした。別所というところは、突き詰めて言いますと、僧侶の終焉の地、このように考えていいかと思っています。すなわち、学業も積み、修行も積み、そういった円熟した僧侶が別所にたくさん集まった。そこで、別所にはすばらしい坊さんたちが集まっているので、若いこれからの僧侶を目指す人たちは、別所に行って勉強すれば、いいお師匠さんに出会えるということで、若い人たちも集まって来た。これがいわゆる「信州

の学海」と言われた所以^{ゆえん}です。

では、別所の宗教施設、一大宗教施設があったのはどこかと言いますと。私が考えますに、北向観音と常楽寺の六角地蔵堂、これは昔の愛染閣のところがありました。それに、常楽寺と安楽寺を結んだ中を「院内」と言っています。院というのはお寺のことです。そういうことで寺域の中を院内と言ったのです。ですから別所は院内から、すなわち一大宗教施設から起こって別所と言われたのであろうと考えられるのです。

現在、安楽寺と常楽寺が遺っていますが、北向観音の石段を登る右側、柏屋本館のあるあの辺りから柏屋別荘のある辺りにかけて、そこに長楽寺というお寺があったのであろうと言われています。それらはみな「楽」という字が付きますので、別所では三楽寺があった。そしてなお、三楽四院、4つの院があった、こういうように言われております。

ですので、別所は現在温泉保養地として全国的に有名になっていますが、一番の起こりは宗教施設であったとみていいのではないかと思います。

次に「塩野神社」の方へいきたいと思えます。塩野神社の祭神は、素戔鳴尊（すさのおのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこのみこと）の3柱

の神が祀られています。これは独鈷山信仰によって生まれた神社と言えるかと思えます。この独鈷山というのは、塩田平の水源地にあたる場所に位置しておりまして、奥社は独鈷山にあったということです。〔スライドを示して〕これは塩野神社の鳥居です。この鳥居から塩野神社の入り口までの間が約2町、約218mあって、これが「流鏑馬道^{りゅうじやまみち}」であつたらうと桜井松夫先生が発見して下さいました。現在、これは流鏑馬道ということになっています。これが塩野神社の本殿です。この塩野神社は、武田信玄が、上杉謙信と戦っている最中に、越後境に新しい城を造りたい、そこで無事に城が造れるよう祈願した神社とされています。塩野神社は塩田平の水源地の一つの神社と考えられています。

〔スライドを示して〕これが独鈷山の頂上です。これが龍王山です。写真のここが鷲ヶ峰^{すずがみね}と見えますので、これを鷲ヶ峰と言います。この塩野神社はこの鷲ヶ峰に祀られていた。これが下って来て現在の位置に祀られているということです。60年に1度行われる「甲子祭（きのえねさい）」は、この地方の大祭として大事にされていますが、60年というのは非常に長過ぎ、祭の継承をするには大変苦勞をしているのです。30年に1度

はしなければいけないということで、つい昨年に行われました。でも30年でも長いですね。生島足島神社の大祭は6年に1度ですが、そのくらいが継承するには良いかと思えます。10年以上ですと、継承もなかなか大変かと思えます。

それでは続いて中禅寺に移ります。中禅寺は、龍王山延命院中禅寺というのが正式な名前です。龍王山というのが山号ですが、これは龍王山という山があり、それが山号の起こりなのです。延命院というのは、木造の延命地蔵菩薩^{はんかざう}半跏像が祀られていることから、その延命地蔵から延命院となっています。独鈷山は昔から独鈷山と言ったのではないのです。本来の独鈷山は、塩田のいま弘法山と言っているところに弘法大師が独鈷を埋めたと言われています。その独鈷の謂われが大きく広がって山系全体を指すようになったということです。独鈷山は、昔は殿上山と言われていたものです。その連なりに龍王山があります。龍王山には龍王が祀られています。龍王が祀られているので龍王山と名付けられたということです。多くのお寺では、山号は信仰上の意味をもって山号としています。金剛山明照院、崇福山安楽寺、一乗山観音院大法寺、このようになっていますが、実際には山を持っているお寺はありません。ですが、

中禅寺は事実として龍王山という山を持っております。そこが大事なところですよ。

山をご神体としているところは、奈良の三輪山大神神社^{おみかみ}、ここは三輪山をもって神霊神社としています。ここには社殿は設けてありません。三輪山そのものが御神体であるということで、これは生島足島神社や泥宮と通じるものです。私たちがお詣するのは三輪鳥居の手前にある拝殿のところでお詣しているわけです。奥に足を踏み入れることはできません。禁足地です。三輪山は御神体山であります。これと同じのが諏訪の上社本宮がそうです。本殿としての建物がないことは有名でして、守屋山麓^{みやまがき}の瑞垣で囲まれた霊林の前面に霊殿、拝殿などがあります。私たちがこの拝殿の手前でお詣しているわけですよ。ここにも本殿というものはありません。それは守屋山が御神体である。またこれと同じことが龍王山にも言えるということです。

〔スライドを示しながら〕これは中部地方に一つしかない木造の薬師堂です。修験道の創始者の役小角（えんのおずぬ）が中禅寺の護摩壇に祀られています。真ん中に祀られているのは不動尊ですが、その横に祀られているのが役小角です。これは中禅寺が修験道の道場であったことを示しているとみていただいてよいか

と思います。これは中禅寺の参道です。この参道には何も無いですね。直角に右に曲がると薬師堂に行きます。真ん中には何も無いですね。これは冬の木の葉の落ちた景色ですが、まさに何も無いですね。この参道は畑に向かってあるのです。ここを24度左に曲げた方向を見るとこちらに來ます。これが独鈷山の頂上でこちらが龍王山です。これが「喜び岩」という岩です。ここで龍王が祀られています。ここで千駄焚きをしたり、あるいは雨が降った時にここで大喜びをしたりしたところから「喜び岩」という名が付いたのです。中禅寺の信仰の中心はまさにこの龍王山であり、ここは修験者の修行の地で、この山は雨乞いをする山です。龍王山は雨乞いの山であり、中禅寺は雨乞いの寺であるということです。

私は昭和23年頃から次のように考え続けています。塩田平の雨乞い三山。夫神岳（拝み岳）、祭神の伊弉諾尊（いざなぎのみこと）から見ますとこれは男神です。高麗神（たかおかみのかみ）が祀られています。この面からみますと、^{おかみ}麗と男神はそのように使い分けられてきたのです。独鈷山はもちろんのこと、鷲ヶ峰、龍王山を含むこの一帯を雨乞いの山、そしてここには有名な弘法大師の伝説がたくさんあったのです。弘法大師は雨乞いの僧で

もあったこととなります。以上の二つの山が全国的に有名です。次の富士嶽についてはあまり知られていません。私はこれを是非付け加えていただきたいと思っています。

富士嶽の頂上には「木花開耶媛命（このはなさくやひめのみこと）が祀られています。境内末社として、父で山と水を司どる大山津見神（おやまづみのかみ）が祀られています。中腹には大姥様（おおばさま）が祀られています。雨乞いの神として祀られたものです。この大姥様には、木花開耶媛命の姉である石長比売命（いわながひめのみこと）のことです。それぞれの場所はちがいますが、父神、姉神、妹神が祀られています。ですから、この富士嶽は、全山神で統一されています。しかもこれも雨乞いの山です。

江戸時代の上田藩には雨乞いの山が、4つありました。青木の子檀嶺岳、塩田平の富士嶽、上田の太郎山、遠く烏帽子岳、この4つの場所で雨乞いが行なわれました。ここに役人を派遣し、雨乞いをしたのです。このことは、影が薄れ、忘れられてしまっているのです。夫神岳と弘法大師で有名な独鈷山だけが塩田の雨乞いの山とになっていますが、そこに富士嶽を加えていただいで、「塩田平の雨乞い三山」と呼んでいただければと思います。

次に修験者のことですが、面白い記録がありましたので、ご紹介します。元禄4年に「来迎寺御普請覚帳」というものがありまして、それを見ますと、これには上田藩では2万5千人が動員され、1丈約3m土手を上げる工事をしました。その時の記録の中から拾い出したものです。「人足合図のこと」、これで人どのように働かせたか、ということがよく解ります。「1番貝初酉に起き、2番貝2酉に池に出る。」とあります。1番貝、2番貝というのは、貝を吹いたのです。貝を吹いたのは、山伏の人が吹いたのです。それで起きて、池に出たのです。後は1番太鼓から9番太鼓まで、すべて太鼓の合図です。「町屋村清宝院様毎朝貝吹きに願ひ申し候。」毎朝2度来て1番酉に吹いて、2番酉に吹いたというわけです。これは修験道の流れを汲んでいるものと思ひ、ここのレジメに載せておきました。以上です。

下里：ありがとうございます。これで発表はおわりです。地元の方のお話を是非お聞かせいただきたいと思っています。最初に塩野神社の甲子祭保存会の方はいらっしゃいますでしょうか。

宮澤正行：宮澤です。今日のテーマ

に取り上げていただきまして、ありがとうございます。塩野神社は、昨年、甲子祭の中間祭をさせていただきました。そこで、先ほどからお話を聞いて、堂平という言葉が出てきたのですが、鷲ヶ岩の直ぐ傍に「堂平」という地名があります。これも繋がりがあるのかなと思ひました。それから龍王山ですが、昔は雨乞いも大きくされていたようで、雨乞いに必要な水を、独鈷山の向こうに寺屋敷というところがありますが、そこに水が湧いています。そこから水をこぼさないように持ってきて、祈禱をしています。龍王山の頂上に祠があるのですが、その水で祀り、村の男衆が、雨が降るまで、千駄焚きをして、喜び岩で火を焚きながらお祈りをしたわけですね。そこに食事を持って行かなければなりません。龍王山の下の方までは女性が行きますが、そこから上は男性が持ち、食事を上まで上げた。そのことで、次のような話が残っています。いつの時代かわかりませんが、娘が龍王山と一緒に付いていった。でも途中で落ちてしまった。そういう祟りがあった。その坂を「十七ご坂」と言った。そういう地名もあります。17歳の娘が落ちたという坂です。そんなところが古い方から聞いた話です。

下里：ありがとうございます。記録

に残すべき貴重な伝承話と思います。続いて真田の宮島さんからお話を伺いたいと思います。

宮島武義：宮島です。司馬遼太郎先生が、鉄なくしては、日本史を語れずと言っています。また白山信仰を避けて日本史は語れないと私は思っています。伊弉諾（いざなぎ）、伊弉冉（いざなみ）、その子供の少名彦（すくなひこ）がいます。これは一寸法師の話に繋がります。いざなぎ、いざなみは兄弟婚ですね。そのため良い子が生まれなかった。小さな子供が生まれたので、それで本国に返されるんですね。もう一つの顔が恵比寿様です。先ほどからいろいろ言われていますが、^ゝあめ、とか^ゝひ、は、すべて鉄に関係するのです。製鉄が一番の秘密です。東山は鉄の山です。^ゝはせ、は^ゝ鉄うけ、という意味です。^ゝ俵ばっせ、は、そこからきている。あの形は、要するに砂鉄掬いからきているのです。

「あら、えっささ〜」はドジョウ掬いではなく、砂鉄掬いです。カップ伝説は、川に生きる人、要するに砂鉄掬いの人のことです。そういうことを頭に入れておいて欲しいです。仏様のもう一つの顔は神様ですね。神様は、王が死んで神様になったのです。製鉄を征した人が祀られて神となった。不動明王のもう一つの顔

は天部ですね。天部の象徴は何かというと竜ですね。そういうことに疑問を持つと、歴史は違った歴史になると思います。

この塩田は本当に面白い地です。浅間池というのは、最高の鉄の場です。製鉄にとって一番大事なものは松の木です。御柱は東山から必ず切りますね。製鉄に一番大事な木は松の木です。火力が一番強いのです。今でも刀鍛冶の炭は松ですね。だから製鉄の産地には松林が多いのです。松茸の産地は製鉄の産地と言ってもおかしくないのです。だから、この塩田平も北條氏が狙ったのです。真田は製鉄の場だったのです。長くなのでこの辺で止めます。

下里：鉄の話は大事な話だと思います。最後に修験道について戸隠から塩沢さんがいらっしゃっていると思いますので、一言ご発言をお願いいたします。

古田：レイラインを富士山と反対に伸ばしていくと、戸隠となりますが、どうでしょうか。

塩澤研一：塩澤と言います。きょうは大変すばらしいお話を聞かせていただいて、本当にありがとうございます。私は、戸隠というより、飯綱高原にいます。飯綱高原の観光協

会長をさせていただいています。実は私が今住んでいるところは飯綱なのですが、これは江戸期までは戸隠の神社の神領なのです。戸隠と芋井村、そこには様々な争いがありました。130年くらい論争があったようです。明治に入った時に、戸隠から芋井村に権利が移った。その背景には飯縄神社の惣社があります。これはあまり知られていないのですが、武田信玄が寄進をしたという飯縄神社の惣社があります。この神社の神主をやっていたのが、代々^ゝ仁科仁十郎、ですが、飯縄山の頂上の権利を持っていたのは、中間の飯縄原の権利は持っていなかった。それで、当時の真田藩の佐久間象山先生と徳川家に関わりをもつ松代藩士の方、その二人にお願いをして、その地を戸隠から、いわば、横取りをしてしまった。そういった話があります。いずれにしましても、武田信玄は大きな関わりをもっていたらしいのです。戸隠の奥社から瑠璃山を通ったラインが、内田先生が話されたラインがきっちり引かれているんですね…。

いずれにしましても、歴史においては時間軸と方向性が大事かと思えます。方向性ということでは、これは春分・秋分ないしは夏至・冬至の太陽の運行が大きく影響していると思いますが、もう一つ最後にお

しゃられた金属というものは非常に大きな意味を持っていると思うのです。飯綱にも^ゝ鑪（たたら）、という地、いわば、冶金の地がありますが、私はこの修験道というのは、たぶん渡来人が修験という名前を借りた金属技術者集団であったと思っています。修験者という名を借りて各地の金属探査を中心にしてきた。たぶん空海はそういうことと非常に深いつながりがあったと思っています。彼は当時私度僧であったにも拘わらず、莫大な金塊を持って中国に渡った歴史と大きなつながりがあるのだと思います。塩田にしても飯綱にしても、白山ないし月山講にしても、そこに眠っている重金属と修験道とは非常に大きなつながりがあって、優れた科学技術者集団が修験者という名を借りて全国を探索してきたのではないかと。精神的世界だけでなく、実は科学の世界を極めた優れた技術者たちが、全国制覇をしていった古代史に目を向けるととても面白いと感じています。今日は、3つの話をいただいたので、すごいなと聞かせていただきました。ありがとうございました。

内田：せっかく戸隠の話ができましたので、ちょっと捕捉をさせていただきます。その前に、鉄あるいは金ということですが、この3月2日に若

狭でお水送りという儀式があります。これは奈良のお水取りとセットになっていて、その10日前に奈良神宮寺から「あかえ」を汲んでそれを「う」のせ、に流すと、10日経って東大寺二月堂の若狭井から湧きだす。それを十一面観音に捧げる儀式なのですが、簡単に言いますと水銀を送るといふ儀式です。水銀は、中国の鍛錬術では不老不死の妙薬を作るための重要な材料です。山伏が陀羅尼漬げや百草丸を飲みますが、この万能薬に昔は水銀が含まれていた。もう一つ水銀の大事な役目は、金を精製する時に必要なのです。東大寺ですから、当然大仏建立のために水銀が大量に必要なのだ。そういうことを象徴しています。空海が若狭で「味方一観音」という小観音を自然石に彫付けています。この観音の向きが、「うりわりの滝」という地を指しています。そこが有名な水銀鉱脈なのです。ですので、空海を追っていきますと、空海があらぬ方向に向けて彫った観音様の向きの方向に行くと、重要なポイントがあって、そこには水銀やら金やら鉄などの産地があるということがあります。

〔スライドを示しながら〕これが戸隠の奥社です。奥社の参道がどこを向いているかということです。これは生島足島神社とちょっと違って、冬至の日の出の方向を向いています。

反対を向くと夏至の日の入りとなります。戸隠の奥社の本殿の一番奥に安置されている鏡、それは冬至の日にお詣すると、そこに直射日光がもろに当たるととても神々しい光景が見られます。これも典型的な例ですね。〔スライドを示しながら〕これは白馬の方です。長野県北部の方では、生島足島神社とは90度ずれるかたちでラインがありますが、右の斜めの線が奥社の参道を表しています。それから、並行する斜めの線があります。白馬を中心に風切地蔵の言い伝えが昔からあって、風切地蔵を結んだ線の南には魔が入ってこないといふ昔から伝えられています。それを現地検証すると、まさに冬至と夏至を結ぶラインが見えてくる。このようなこともあります。北信地方それにこの辺りもそうですが、非常に興味深いラインが見えてきます。それには鉱物資源なども当然関わってきます。面白ところです。

日本武尊(やまとたけるのみこと)が別所温泉を開湯したという伝説がありますね。大和武が、東征の帰りにどこを通ったかといふと、二つ説があります。群馬から長野へ入ったというルートは確かだろう。それは鳥居峠を通ったのか碓氷峠なのか、2説があります。碓氷峠、「うす日とうげ」と書いてありますが、これを見ますと、碓氷峠のルートの

方が、信憑性が高いのではないかとされています。が、面白いのは、碓氷峠と旧軽井沢の位置関係を見ますと、旧軽井沢から見て碓氷峠の方向が夏至の太陽が昇ってくる方向なのです。上田の生島足島神社のラインと同じになるのです。そこに大和武伝説がある。そこから考えますと、大和武というものは太陽信仰と関係した何かを象徴していたのではないかという気がいたします。その辺りをこれから深く調べて行きたいと思えます。

下里：最後にまとめの言葉をいただきたいと思えます。

宮本：生島足島神社の「お籠り祭」という大事な神事を落としてしまいました。これは11月3日に、諏訪神がご神橋を渡って本殿の右側の「籠り殿」というところに入りまして、そこでご飯を炊いて、生島神・足島神に奉仕をする。これが11月3日に始まりまして、その日が土曜日であれば、毎週土曜日ごとにやって、26回やりますと、4月18日になります。そしてこの18日に諏訪社にお帰りになる。こういう神事があります。これは生島足島神社の神事の中で最も大事な神事です。これはどういうことかと言いますと、諏訪様が信州に入られる時に地の神として生島神・

足島神がここに鎮座しておられた。その時、断りなしに入られると争いが起きる。そのため地の神である生島神・足島神に対して諏訪様が敬意を表して、もてなして、生島神・足島神の許しを得て入った。そのような意義がこのお籠り祭という神事には込められているということです。御柱祭の時に4本の柱が立ちますが、これは諏訪神が生島足島神社の社殿を建て替えるためのものであるという伝承もあるわけです。ですので、生島足島神は地の神として、諏訪様より前からおられたということです。

下里：最後に牛山先生お願いします。

牛山：宮本先生から地元のことを大変詳しくお話ししていただきました。私は先ほど、日本の寺院は里山系と山岳系があるというお話をさせていただきました。今日のお話を聞いて、独鈷山というのは霊山系として考え直す必要があるかなと思いました。内田先生からレイラインのお話がありました。それについて会場から、歴史学として正當に扱っていないのではないかというご指摘がありました。それは我々も反省をしなければいけない点ですが、歴史学はどうしても史料から出発するという伝統的な手法があるのです。でも最近では地名などをどのように活用するのか

という事が問題とされてはいますが、どうしても史料的に判別できないと歴史学の中に位置づけることはできません。先ほどの製鉄のこともそうです。修験者は金属鉱山の開発者であったのではないかという指摘は昔からあります。でも実際には史料から出てこないものですから、我々は躊躇してしまうのです。現象の世界では大切なことがたくさんあります。それをどう活かしていくのかということが今後の課題だと思っています。

下里：最後にまとめとして、是非みなさんをお願いしたいことは、歴史

研究者にとって史料がいのちなのです。みなさんのお宅に眠っているかもしれない古文書資料が大事になってくるのです。また地元に残っている伝承など、ぜひ、学問のアカデミズムの世界に積極的に発信し伝えてほしいし、私たちもみなさんの中にある知識、智恵を活かしていきたいと思います。今日のパネルディスカッションは、非常に有意義ではなかったかと思います。これは、地域の未来に向けての文化資産であることは間違いのないことだと思います。

以上で終わりにしたいと思います。みなさんありがとうございました。

シンポジウム

「信州の魅力発見」

日時：2015年7月7日

会場：別所温泉

あいそめの湯ホール